

今年は、12月24日が日曜日なので、その日にクリスマス礼拝をしました。そして今日は、クリスマスのあとの最初の日曜日、12月31日の大晦日です。降誕日は12月25日で、翌日の26日は聖ステパノ日。キリスト教の最初の殉教者を記念します。27日は福音記者使徒聖ヨハネ日。そして28日が聖なる幼子の日になります。

降誕日からいろんな記念日が続くのは、降誕日には都合が悪くても、何とかこの季節に礼拝に出席し、クリスマスの聖餐を受け、その意味を深く理解するためだろうと思います。

今日の福音書は、降誕日と同じヨハネによる福音書の冒頭から始まります。ただ、降誕日の福音書と違うのは、15節から18節までが追加されていることです。この中でも、私の心に残ったのは、17節目です。

『17:律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。』ここで注意して読まなければならないことは、律法の方は、『与えられた』のですが、恵みと真理は『現れた』という、表現の違いです。

律法の方は、与えられるもの。つまり人間の方は、受ける側であって、もっと言えば、律法に支配されているのです。パウロの言葉を借りるなら、人間は律法の奴隷になっていて、従わなければならないものでした。日曜日は、安息日なので、礼拝しなければならない、ということで、それに縛られているわけです。今日は忙しい大晦日なのに、日曜日だから主日礼拝をまもらなければならない、ということですね。

しかし、恵みと真理は『現れた』。これは、以前の口語訳聖書では『来た』と訳されていて、英語では「come」来るということなんですが、もともとのギリシャ語のイメージは、『出来事になった』『作られた』みたいな、何か体験するような出来事なのです。

『恵み』というのは、神様の力のことです。私たちの努力によってではなく、神様の力が働いて、私たちがその恩恵を味わう、ということで、『恵み』という言葉ができました。

そして、『真理』というのは、『まことのもの』『本物』という意味で、「神様そのもの」を表す言葉です。ですから、「恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた」とは、「神様の本物の力に溢れた体験をした。」ということだろうと思います。

『律法』という受け身のものと、『恵みと真理』という体験する出来事を比べて見ましょう。私たちは、年末の忙しい時だということに、12月25日も過ぎて、世の中はクリスマスから新年の飾りに替わっています。それでも日曜日だから礼拝をささげています。これは『安息日を聖とせよ』という律法の中の中心、十戒に従ったことでしょう。日曜日なんだから仕方ないじゃないか。それがおきてだ。というわけでしょう。

しかし、もし、『今日も歌が歌いたいから教会へ行こう。集まったらまた、みんなの顔を見ることができて楽しいぞ。それを先週のように今日も体験しよう』と思うならもう受け身ではありません。

教会に集まって、大きな声で歌うのが楽しい、という譬えは、新型コロナウイルスの感染予防のためにはふさわしくない譬えだったかもしれませんが、そろそろ解禁されてもいいのではないか。

私たちは、礼拝することも、他の家事などをおこなうことも、『義務だから』『これがおきてだから』というなら、あまり楽しくないでしょうが、『素晴らしい体験、また味わいたい出来事』と思っで行うなら、私たちは奴隷ではなく、自由な者になるのです。

ヨハネが書いた福音書の8章の中には、『イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。32:あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。(8:31~32)」』というのがあります。

わたしたちが、義務で礼拝するのではなく、イエス・キリストを体験する。神様との本当の交わりに出会うことを経験することで、自由になり、神様の子どもになれると、私は思うのです。

それで、私はこの『恵みと真理に満ちた、イエス様を体験すること。』というのは、同じところへ何度も行く、『リピーター』ということと、関連があるように思います。

私は、イスラエルへ5回行きました。最初は父が金を出してくれたので、弟と一緒に聖地旅行をしました。そうすると、ある程度時間が過ぎて、またあの体験をしたいので、ということで、二度目、三度目と繰り返すのです。神様はどこにもおられますが、実際にイエス様が歩き、また詩編に歌われた場所に身を置くことで、聖書の言葉が身近に感じられるからです。

義務で行くなら、一度で終わるのですが、またあの感動を味わいたい、ということで、繰り返すんですね。これはイスラエルに限らず、いろんなものに例えられるでしょう。

私は15年前に出会った、「もしドラ」という小説がきっかけで、教会の宣教もやはり、感動を繰り返し味わうことだと思ふようになりました。私たちが見た映画、読んだ本、味わった食べものなどは、また味わいたいし、人にも伝えたい、感動する出来事でしょう。教会で私たちが目指すことも、そのあたりと似ているのではないか。

わたしたちの行っている礼拝もそれと同じでしょう。クリスマスというのは、言葉を分析すると、クライスト・マスという言葉になります。キリストのミサ。聖餐式のことです。6日前が本来のクリスマス、降誕日でしたが、実は日曜日に教会で聖餐式をするのは、クリスマスの繰り返しなんです。イエス様の誕生を祝うだけでなく、キリストを私の内に迎える、それを繰り返して体験しているのです。

今日の福音書が、降誕日の福音書の繰り返しであることは読めばわかります。しかし、今日それに加えられた『17:律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。』という言葉から、私たちは、大切なことに気づきたいのです。

ただ、決められたおきてを繰り返している義務としての礼拝ではなく、今日もキリストとの交わりの出来事を体験できる。この交わりが好きだから、また教会の礼拝に出席するのだ、ということを忘れずに、過ごしたいと思います。

そして、礼拝だけでなく、私たちが日常生活で繰り返している仕事、私は朝8時半頃には毎日、最初は鉢植えだったが、教会の庭の土の上に移した、ギャラクシーという名前のアジサイに水をかけることをしていますが、義務ではなく、私が植物を通しての自然との交わりの時だと、喜んでそれをする。そのような生活になることが大切なように思います。